

関西大学図書館蔵契沖和歌資料二軸

乾 善 彦

はじめに

関西大学図書館には、浪華の学僧契沖にかかわる資料が数多くおさめられており、以前、拙稿「関西大学蔵契沖関係書あれこれ」(関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー Vol. 10、2015.3)に、そのあらましを紹介した。その中で、契沖の和歌に関する資料としては、以下の書目をあげている。

【歌書】

- 1、三家私歌集 911.2608 S1 1~3 (上、長嘯 中、長流 下、契沖)
- 2、漫吟集 L24 16-120-B〈刊〉文化10年 西宮彌兵衛・英平吉
- 3、詠富士山百首和歌(詠百首富士山和歌)
 - ①F4 911.26 K1 1〈刊〉寛政12 河内屋喜兵衛
 - ②L23 900 7478〈刊〉寛政11 萬屋太治右衛門
- 4、類字名所捕翼抄 C911.26 K1 1-1~4
- 5、類字名所外集 C911.26 K1 2-1~3

その後の調査で、さらに次の一書が確認されている。

- 6、一題一首和歌 C911.257 II-1

これは、『契沖全集 第十三巻 和歌』に翻刻と写真一葉がおさめられおり、先の調査で見落としていたものである。

また、軸物として、当該年度に収集された「契沖蓮歌歌稿」(N8C2*911.15*1)を紹介しているが、2019年度にもう一軸、「立春七首」と題するの和歌軸が加えられた。

本稿は、この軸物二軸について、この度KU-ORCASにおける撮影にともなって調査した、その結果を報告するとともに、若干の考察を加え、今後の研究のための足掛かりとするものである。

契沖の和歌については、その評価はそれほど高くない。契沖が本居宣長に見出されて高い評価を受けるようになったことについては、拙稿「宣長の見た浪華の学僧契沖」(大阪女子大学上方文化研究センター研究年報2号、2001.3)において論じた。その時にふれたことだが、契沖の古典研究に対して高く評する宣長であったが、契沖の和歌に対する評価は、以下のように、やや辛辣なところがある。

ココニウラムラクハ詠歌ノツタナカリシハ、アマリ歌学ノ方ニ心ヲ用ヒ古風ニノミヨルホドニ、ヲノヅカラ歌ハサマデナカリシナルベシ。契沖ハトカク万葉以上ニヨルトミエテ、古今ナドヲサヘ少シハ誤モアルヤウニ思ヘリトミュ。(『排蘆小船』古ノ名歌ドモニ)

宣長は、契沖と下河辺長流の歌を抄出しているが、その奥にも、

右、林葉累塵集、すべての歌のさま、俳諧にちかく、詞も優にはあらず、調高からず。しかれども、なべての詞づかひの上手にて、古へに露もかはらず、一首も近代のいやしきふりは見へずなんある。かゝれば、ちかき世の人はこのまぬふりなるべけれど、又、ちかき世の公家たちのかけてもおよばぬ所あり。されば、此うへに今少し詞を優に調べを高くせば、最上乘たるべし。今、右に抄出せるは中に難なくおもしろきかざりをえれる也。(宣長筆『林葉累塵集契沖長流二家集抄出』奥書)

と記しており、長流・契沖の和歌に対する評価の一端が見受けられる。清水濱臣が文化十年版『自撰漫吟集』の序文に

抑歌は人々の心々をいひあらはすものなれば、かゝる姿もをかしきを、中には誹諧めきけるがあるをみて、そゞろたかゝらぬやうにいひなし、おもひおとす人もあるこそ、かへりていかにぞやおほゆれ。

と契沖の歌風を弁護するような記述があるのも、宣長のこのような言を受けてのこととおもわれ、それが当時のおおかたの評価だったとおもわれる。

しかしながら、契沖は十七才のころから和歌を詠みはじめ、生涯に数多くの和歌を残している。自撰の『漫吟集』は内題の記述によると延宝九(1681)年、契沖四十二歳の時の撰で515~520首(本によって若干出入りがある)をおさめ、最終的には『漫吟集類題』として6034首をおさめる。その数の多さは近世の私家集の中でも群を抜いたものである。濱臣はこの時期、長流・契沖の家集を積極的に刊行しており、ひいき目にみている面もあるだろうが、たとえば古今六帖や歌仙家集の風といい、また、風雅玉葉の風をとみいうように、その歌風を評価する発言するには、それなりの理由があったものと考えられる。後世の評価もみても、決して高い評価というものではないが、濱臣が指摘した歌風については、たとえば『契沖全集 第十三巻 和歌』の解説のように、新古今風とか玉葉風とかさまざま側面のあることが論じられている。

死後ではあるが、公刊された版本も決して少なくない。自選家集『漫吟集』としては、

自撰漫吟集(契沖和歌延宝集) 文化十(1813)年

龍公美本漫吟集 天明七(1787)年

漫吟集類題 文化十二(1815)年

があり、それ以外にも、版行されたものとして、長流との贈答歌をおさめる『和歌唱和集』(文化十二年)、詠富士山百首和歌(寛政十一年版と寛政十二年版の二種の版がある)がある。

自撰『漫吟集』は、長流の家集に加えて木下長嘯子の家集と合わせられて三家和歌集として伝わるのが原形だと考えられる(『契沖全集 巻十三 和歌』解説:638頁)。

関西大学図書館蔵『三家私家集』(911.2608 S1 1~3、写本3冊、国書総目録未収)は、外題打ち付け書きで、上巻「長嘯」、中巻「長流」、下巻「契沖」とあり、それぞれに内題に

三家和歌集上 長嘯(下河辺長流撰)(上巻)

三家和歌集中 長流(五十五歳自集于時/延宝九年五月廿日)(中巻)

三家和歌集下 契沖(四十三(ママ)歳自集于時/延寶九年四月十八日)(下巻)

とあり、『契沖全集 和歌』の解説に、「殿村家本は戦災で焼かれ、その他に三家和歌集の善本が見られない」とされている。本写本も、たしかにあきらかな誤写や数首の歌の出入りがみとめられるが、旧契沖全集所収の殿村本と比べても、これを補う面もあり、比較的善本のように思われる(これについては、稿をあらためて紹介しなければならない)。

一方で、今回紹介するように軸物としても多くの事例が『契沖全集 第十六巻』の「和歌拾遺」に収められている。なかには、『漫吟集類題』にみられない歌もあり、これらを含めて契沖の和歌は語られる必要があろう。本稿では、本学蔵の二軸を紹介するとともに、『契沖全集』に収められている軸類との関係についても考えてみたい。

1, 契沖蓮歌歌稿 N8C2*911.15*1 資料ID 211555177

① 図書館書誌情報 (原本を調査した結果をふまえて、若干、補正を加えた)

[契沖和歌稿] / 契沖 [著]

1 軸 : 103.0×43.2cm

箱書 : 契沖阿闍梨蓮の和歌十首草稿

本紙の大きさ : 16.8×32.6cm

付属物 : 書付「契沖阿闍梨の真跡なる蓮十題の歌にちなみて / 池水のすむも濁るもよそにしてさくやはちすのこゝろなるらむ / かくよめるもの圓珠庵のあるし藤むら叡運なり / 大正六年の春しるすになむ / ㊦ [僧正叡運] [心忒]」1 包

「契沖阿闍梨は……」(明治二十一年) 1 枚

「木の間より……」「このまより……」(本軸の翻字) 各 1 枚

② 内容 : 『漫吟集類題』第 5 夏歌下 蓮 1937-1945, 1878

③ 翻刻 : 拙稿「関西大学蔵契沖関係書あれこれ」(関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー Vol.10, 2015.3)

今回、誤りを訂正し表記を工夫して、さらに右に漫吟集類題の本文を添えた。また、本軸の歌との異同を漫吟集類題の本文に太字で示した。

本紙一枚 (楮紙素紙) 16.8×32.5

このまより簾うこかし吹風に
池のはちすも香を送りつゝ
世の中は何かおもへは塵ならぬ
蓮さへやと心にそとふ
白妙に池の蓮のさくをみよ
わかこゝろにも此花やなき
塵のよを思ひわひては池のへに
はちすをみてそ風にまよへる
風ふけは、すのうき葉にまるふ玉
ひとつなからそあまたなりける
はちす葉のひとつみとりに
白たへの花にくれなる
ましりてそさく
草の庵をむへも玉とはなつけにし
なみそ
むなしとやみむはちす葉の露

漫吟集類題

木の間より簾動かし吹風に
池の蓮も香をおくりつゝ (1937)
世の中は何かおもへは塵ならぬ
蓮さへやと心にそ問ふ (1938)
白妙に池の蓮の咲を見よ
わか心にも此花やなき (1939)
塵の世の思ひわひては池のへに
蓮を見てそ風にきよむる (1940)
風吹ははすの浮葉にまるふ玉
ひとつなからそあまた也ける (1941)
蓮葉のひとつ緑に
白妙の花に紅ましりてそさく (1942)
草の庵をむへも珠とはなつけにし
むれしとなみそ蓮葉の露 (1943)

のいとにもとまらぬは
玉にぬく草葉もあるを

玉にぬく草の糸にもとまらぬは

をは露とる
露とおけともゆらく白玉

露をは露とおける蓮葉 (1944)

玉のうてなに立出て

蓮葉の玉の臺に立出て

蓮葉の露をは

心たかくも咲る花かな (1945)

心たかくもさける花かな

いとはあれと玉にもぬかて蓮葉は

糸はあれと玉にもぬかて蓮葉は

ゆふるる露を風にまかせぬ

ゆふるる露を風にまかせぬ (1878)

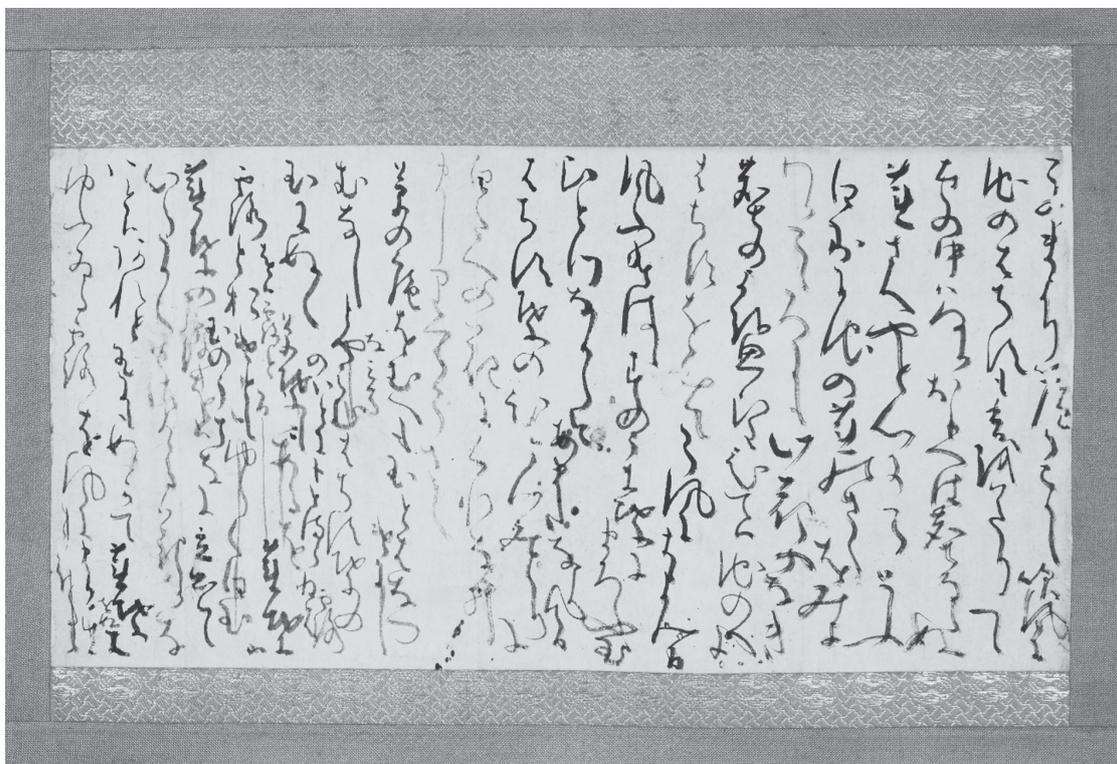
□(せか)む

そ付けたる

※『漫吟集類題』の「蓮」の部の一部と合致する。配列は十首目のみ異なる。訂正のあり方から草稿のように見える。ただし、図版でもわかるように、八首目のもとの歌は「玉にぬく草葉もあるを蓮葉は露とおけともゆらく白玉」とよめるが、行が揺れており、一首を書いた後で推敲を加えたときみには、やや不自然なところがある。本紙の左の端にはいくつか墨痕がみとめられ、さらに歌が続いていたものを切断したものと思われる。

ここにおさめられた歌うたは『漫吟集類題』にしかみえず、その点で本軸との異同は貴重である。また、推敲により訂正されたあとのかたちが『漫吟集類題』とほぼ一致している点や配列も最終歌を除いて一致している点も、『漫吟集類題』との関係から注意される。

四首目 (1940) の結句、「まよへる」は「き(支)よむ(ん)る」とよめなくはないが、「塵の世



1, 契沖蓮歌歌稿

を」は明らかに「を（越）」である。ことばのつづきも「を」がよい。

これと同様の蓮の歌の歌稿の断簡が天理図書館に蔵されている（契沖全集第十六巻：541-542 翻刻：816 写真：818 解説）。本紙は本軸とよく似た素紙であるが、法量が14.8×36.0と大きく異なり、ツレとは考えられない。しかし、訂正の仕方はほぼ同様であり、また、「蓮の歌」の草稿かとも思われる点ではなんらかの関係が考えられる。天理図書館蔵本は、全十三首、七首目と八首目の間に「池水は浅き物からいつみなる」という上の句だけのものがある。1首目から8首目までは、『漫吟集類題』の1924～1930に相当し、本学の軸と同様『漫吟集類題』との関係が考えられる。九首目と十二首目は「蓮の歌」ではなく、『漫吟集類題』では「郭公（ほととぎす）」の部に入る1450と1532の歌。これを除く四首は『漫吟集類題』の1931～1934に相当するが配列が異なる（八～十三首目は、1450、1931、1933、1934、1532、1932の順）。同じ目的でよまれた歌の草稿が大きさの異なる紙に、その場その場でものされたものか、あるいは草稿そのものではなく、それをもう一度そのままに書き写したものかとも考えられ、詳細は不明である。

2, 立春七首 N8C2*911.15*2 資料ID 212156624

① 図書館書誌情報（原本を調査した結果をふまえて、若干、補正を加えた）

立春七首 / 契沖 [書]

1軸；103.8×52.1cm

箱書（表）：契沖阿闍梨立春歳暮和歌横軸，箱書（裏）：明治十八年乙酉春日鑑之題函□ / 米僊田寛（久保田米僊か？だとすると、田寛は「久保田寛」のことか）

本紙の大きさ：25.7×42.7cm（薄墨紙部分）

薄葉の薄墨紙を厚手の鳥の子紙の上に押したもの

附属物：極札1枚「契沖阿闍梨 梅かえに / おしなへて ㊦ [(不明)] (表)、「立春歳暮歌十首 名アリ / 甲申秋 ㊦ [思無邪 (上方・朱)] [昔斎 (下方・墨)] (裏)

書付、「契沖歌十首」(本軸の翻字) 1包

② 翻刻

翻刻にあたっては、()に『漫吟集類題』の歌番号を、その後に○数字で、国会図書館蔵「円珠庵契沖詠草」の歌順を示した。また、右に漫吟集類題の本文との異同を示した（なお、二首目「ひと、せを」の歌の第四句「けふは八雲に」を『契沖全集』の翻刻は「けふりは雲に」とするが、デジタルデータを参観するに、国会軸も「けふは八雲に」となっており、本軸、『漫吟集類題』とともに異同はないことになる。

立春七首 契沖

梅かえに春やこもりて鶯の

花のくしけもけふに明らむ (46) ①

ひと、せをやまとことはたとふれは

けふは八雲にたてる春かな (48) ②

からにしきやまと哥にもたち出よ

けふは春とそ山もかすめる (69) ③

山もかすめる一峰もかすめる (漫)

門松のまつとしきかは今とてや
きのふのとしのけふ帰らん (40) ⑤

天の戸を年かくれぬと吹とちし
かせのちからや春にあくらむ ⑥

朝なさなめつらしからぬ天の戸も
いつかはあけし年と春とに (36) ④

いにしへのなにはの春や立かへる
けふりそかすむ民のかまとに (27) ⑦

歳暮三首

おしなへて山の木ことにふる雪の
たかきいやしきくる、年かな (3469)

我はた、ゆくにまかせて送りでん
人そかへりて年をせむなる (3475)

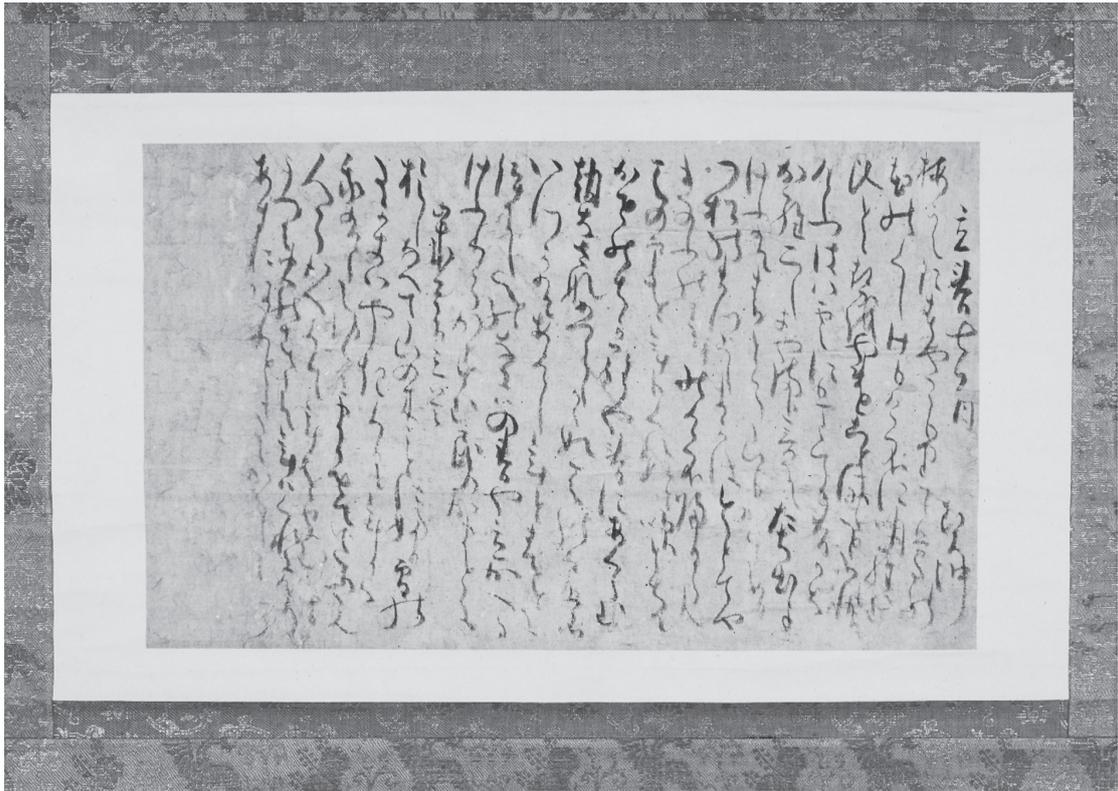
うつみ火の春にて年はくれにけり
あすにあふともた、かくしこそ (3476) ⑭ (巻軸)

※本軸に関しては、『契沖全集十六』所収の、国会図書館蔵「円珠庵契沖詠草」(翻刻：537～538頁、解説：816～817頁)との関係を考える必要がある。国会図書館蔵の軸は国会図書館ライブラリーで閲覧可能。この軸には、立春の歌七首をはじめ、立春鶯(二首)、初春の歌(一首)、海辺霞(一首)、若菜(三首)、春の歌の中に(一首)、鶯(四首)、柳(二首)、梅(二首)と春の歌二十三首と歳暮(一首)、伊勢家集(一首)が書かれている。このうち立春七首と歳暮一首とが、本軸と一致する。しかも、漫吟集類題に収載されていない五首目(国会軸では六首目)の「天の戸を年かくれぬと吹とちしかせのちからや春にあくらむ」の歌を共有する点でも、国会軸と本軸との関係は否定できない。

「立春七首」は、すべて同じ歌であるが、国会軸とは順番が異なる。つまり、国会軸の四首目にあたる「あさなさな」の歌が、関大軸では六首目に位置する。これによって、それぞれの歌のつながりは、関大軸の方がよくなっている。つまり、二首目と三首目は「やまところば」と「やまとうた」とが類似の語を含み、三首目と四首目は、一首目からだが「けふ」を共有し、四首目と五首目は、百人一首歌を本歌とすることで共通する。五首目と六首目は「天の戸」を共有して、最終の歌につながっている。

「歳暮」三首は、国会軸には三首目だけをのせる。『漫吟集類題』の出現順になっており、二首目と三首目は連続している。これによって、本軸が直接国会軸のようなものをもとにしたのでないことはうかがわれる。これらの歌うたは『漫吟集類題』以外には見えず、その点でも、両者の関係はもう少し考える必要があるが、現在の資料では、想像の域を出るものとはならない。

『契沖全集』解説では、「天の戸を」の歌が歌集類に見出されないこと、春の歌を集めたものなのに、末に「歳暮」の歌(本軸末尾の「うつみ火の」の歌)のあるのが不審であることの指摘がなされているが、本軸のように、立春歌と歳暮歌とを首尾に置いた十首歌の形態の軸を考えれば、納得できる面がある。



2. 立春七首

これからの展望として

この二軸に共通して言えることは、契沖の歌がさまざまな形式で、歌集とは異なる形で伝承されることが多くあり、2の「立春七首」のように、歌題の下に「契沖」の署名のあるようなものが、複数みられ、先に紹介した本学図書館蔵の「萬葉集最極秘和詞灌頂新點」も、和歌ではないが署名をもつ。署名のあることの意味はいくつか考えられようが、国会図書館軸の『契沖全集』解説が「自署していることから想像すると、何びとかに書き与えたものであろう」というように、そのために、それだけを書いて、人に与えたものとするのが自然であろう。だとすると、同じようなものが、いくつか作られたことになるが、国会図書館の方は、歌数も多く長大なものであるが、内容からすると、末尾の二首が孤立しており統一感がない。したがって、特別なものとして他人に与えたというものではなさそうである。しかし、前後の余白は整っており、書としてはまとまりのあるものとなっている。逆に本学のものは、立春と歳暮で首尾一貫しているが、書き出し前の余白が狭く、末尾に余白が大きくあり、人に与えたものだとすると、全体が整わない感じがする。

1の「蓮歌歌稿」にしても、ひとつの作品としては扱い難いのであるが、草稿としては訂正のある部分のありようは、やや不自然の感がある。非常に近接した歌をおさめる天理軸との関係も気になるところである。何回かおこなわれた、蓮歌の歌稿と推敲のあとがまとまって軸装されて何人かに分け与えられるということがあったのかもしれない。

本学には、以前に紹介したように（先掲「関西大学蔵契沖関係書あれこれ」（関西大学アジア文化研究センターディスカッションペーパー Vol.10、2015.3））、歌軸のほか軸物として「萬葉集最極

秘和譚灌頂新點」(N8C2 911.124 2) と、「背面先生説」(N8C2 811.56 501) の二軸を収蔵する。このような契沖の和歌軸をはじめとする断片的な資料は、それぞれを個別ものもとして扱うべきことはもとより重要であるが、全体として扱うことも不可欠な要素として注意せられることになろう。そのような視点をこれからの研究課題として提起しながら、新収の歌軸二軸の紹介とする。

付記

図版の掲載にあたり、関西大学図書館のご許可をえた。本図版は、KU-ORCASの研究の一環として撮影されたものであり、本稿はその成果の一部である。また、本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)(代表：田中大士)および基盤研究(C)(代表：佐野宏)の研究成果の一部でもある。

(いぬい よしひこ 関西大学文学部教授)